

かきくけこ

特 261

329

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



特 261  
329

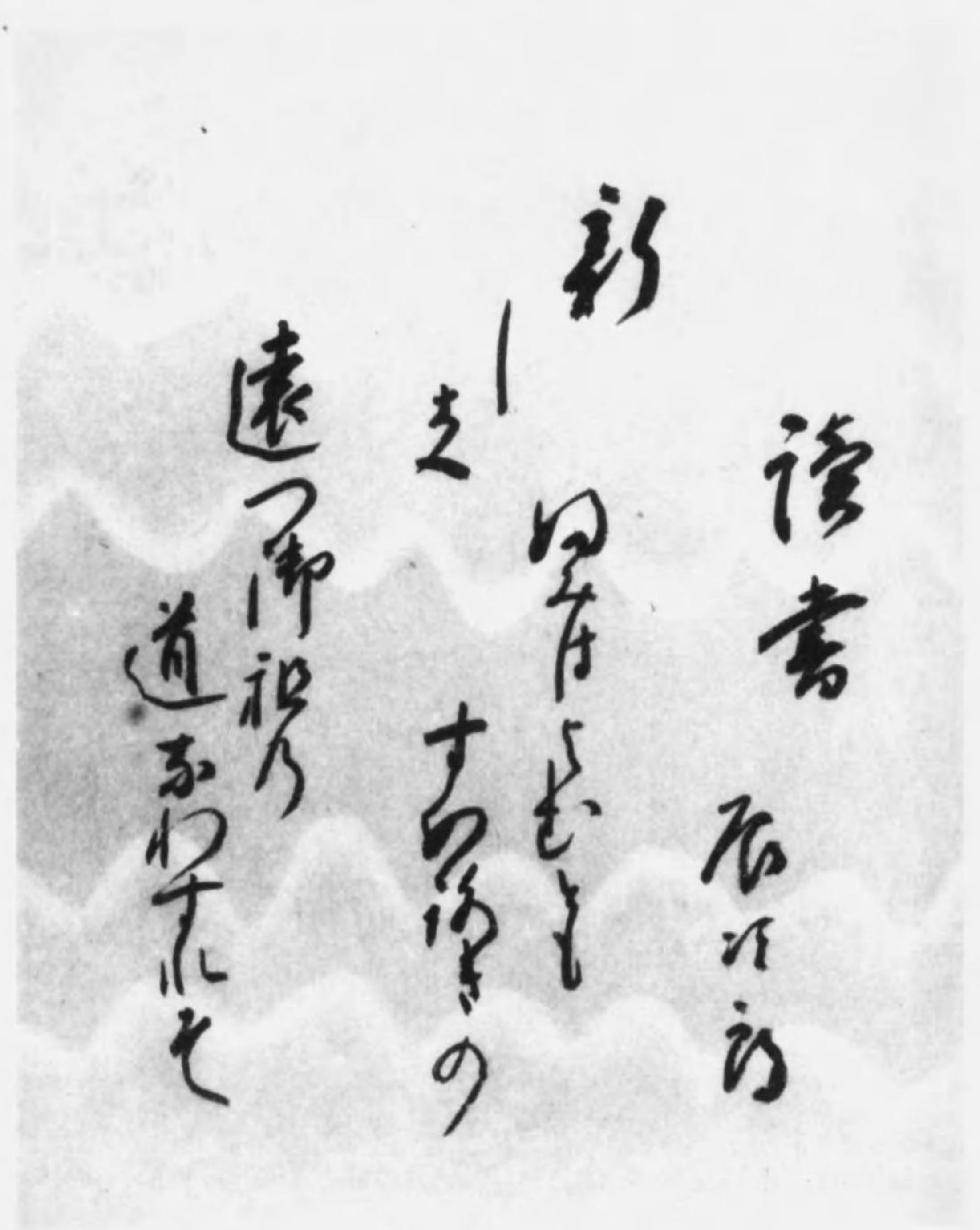


周禮





影 遺



後書

石のり

新

走

すのり

遠つ御祈り

道ふわすれを

遺 墨

目次

遺 遺 序  
影 墨 文

鳥野幸次

春	夏	秋	冬	雜	病床日誌	漢詩	略年譜	跋
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一	九	一七	三	三五	五五	六五	七五	八五

文之

本多辰次郎博士卒後の三年その手録中より和歌漢詩を  
拾集整理して之を印行し以て靈前に供し且は親族故舊  
に頒たむとせらるゝに當り余に一言を序せむことを需  
められたり 思ふに博士が深遠なる學術と高邁なる人  
格とを以て終始その公職に盡瘁せらるゝ傍又廣く社會  
に貢獻せられしことは今更謂ふを要せざる所而して其  
の和歌漢詩に於ける素より博士の嗜好に出で閑時の餘  
技に過ぎざりきと雖も折に觸れ事に應じて吟詠せられ  
しもの亦自ら一家の風格ありて其の人と成りを想見す  
るに足りぬべく今にして此の企圖あるまた意義深しと  
謂ふべきなり 曩に博士が職を宮内省に奉ぜらるゝや

余もまた同一官廳の下に在り博士の令名を聞き其の風  
幸に接せし事も一再に止まらざりしを記憶す 随つて  
今その作物を見また是れに序せむとするに當りてはそ  
ぞろに往時の追懷せられて感慨の情轉た禁ずべからざ  
るものあり 即ち重ねて書名をもと乞はるゝがまゝに  
かたみの花と題し謹みて

うつつには逢ふよしもなし言の葉の

かたみの花はさきにほへとも

といふ一首を手向け瞑目之を久しうしけり

昭和十五年端午の節

御歌所寄人 鳥野幸次

かたみの花

春

初日

初日かけいく千代かけてあふくかなおほうち山の松のこすゑに  
大空も晴れてくまなく照る初日をさまる御代のしるしなりけり

門松

あらたまの年たつ市に出て見れは見わたすかきり松そつつける

新年感

ことさらに祝はむ心なけれともとしたつ今日はほほゑまれつつ

春

春されはひなのさともにきはしく花もわらへり鳥もうたへり  
霜をしのきつもる雪をも物とせずほひ出てたる梅そけたかき

春 土

天ならてはるは土より來たるらむ空さむけれとくさのもえたる

早春花

春されははや咲きいてぬ梅のはなのこれる雪とまかふはかりに

春 雪

はるかせにおくられてまふあわ雪は花にくるへる蝶かとも見ゆ  
春の色うこきそめたりけふはしもたたちに消えむ雪は降れとも

霞

昨日まであらはに見えし富士のねも今朝はかすみて姿なこみぬ

春 雨

ちりひちに蔽はれし庭の草木をもきよくあらひてはる雨の降る

柳

見わたせは軒端の柳染めかけてはる來にけりと知らせかほなり

春 堤

はるけくも來つるものかなうくひすのこゑにひかれて春の堤に

春 蝶

しはらくはとひかふ蝶と春の野に遊びても見むちりをよきつつ

柳條長

なかき絲にめくみそめけり青柳は春來とつくるつかひなるへし

梅

ちきりたるうくひすまつと梅のはな雪を凌きてさきそめにけり

梅 薫

うくひすを招きかほなりわかやとのまかきの梅の高くかをりて  
杖ひきて道行くひとの香を聞きて梅やさけるとたつね來にけり

行路鶯

足とめてきけともあかす家つとにせむすへもかならくひすの聲

林中鶯

奥山の谷はいてもうくひすはしつけきはやしたつねてそなく  
あさなくうふすな神に詣て來てはやしの中のうくひすをきく

おもはすもふかく入りけり山林なくうくひすのこゑにひかれて

鶯

何時きくも長閑けかりけりうくひすを春告鳥と云ふもことわり

暮春鶯

あさなあさな來つつなきつる鶯は春とともにそいつちゆきけむ

若草

春日なるわかくさ山のあさみとり誰よはななくに小鹿あつまる  
曆なき山への庵ももえ出つるくさのみとりにはるを知るらむ

春夜鐘聲

鳥はうたひ花はさかりの春なれとうらさひしきは夜半の鐘の音

雛祭



少女子のひひな遊びもおのつから御國ふりをそあらはしにける

初花

隠處もはるは知りてやとひ來らむ櫻ひともと咲きそめにけり

櫻

うらうらと霞のおくにほひ出つる花は皇國のはなにこそあれ  
さくら花咲きて散るまのひと盛り人のころをくるはするかな

海棠

うつろひしさくらのあとの庭の中にあるしとにほふ海棠のはな

海邊桃

のとけさにそそろあるきに出てて來て海邊にほふ桃の花見る

花

橋もなきたにをへたててあさ夕にほふ高嶺のはなをこそみれ  
あしひきの山のみねなるさくら花うつるにほひに天もゑふらむ

惜落花

はたさはりよき春風もいとほしなゆきと降り來る花ををしめは

池邊躑躅

くれなるにほふつつしのうつろひて花のかかみとなれる池水

藤

むらさきの雲のたなひくことくなり風になかる藤なみのはな  
藤かつらまねき來ぬらむはる風のおくり來ぬらむむらさきの雲  
うたひまふ人をもてなす藤なみはけふの宴のあるしなるらむ

藤花宴

ことしこそ君を祝はめむらさきの雲とたなひく花のかけにて

薔 薇

やまさくら散りての後を我世そとほこりに咲く花うはらかな

夏

挿 秧

早苗とるうたこゑたかくひひくらむ三上の里のゆきの御田には  
田の中に家居し居れはおもしろく植女のうたも日こと聞くかな  
わかやとの前田に立ちてをと女らか小笠ならへて早苗とるなり

卯 花

ゆふ月夜かきにあまれる卯の花は雪のいろをもうはひけるかな

さつき躑躅

もゆること紅きさつきの池みつにうつるにほひは魚もめつらむ

旅中梅雨

船くるま思ふままなる御代なれとなほうきものは旅のさみたれ

睡蓮

ひつし草にほひ出てたり友人の訪ひくるころとなるかうれしさ  
睡蓮のはなさく池を越えて吹くかせにそなつのあつさわするる

蓮

いろも香も濁りにしまぬころにて朝またきより園をきよむる

紫陽花

うたてくも日ことに變る世の様をうつすに似たるあちさるの花

橘

たちはなは今盛りなりほとときすはやも宿かれ散りはてぬまに

都時鳥

野邊にのみ鳴くと思ひしほとときす今日めつらしく都にてなく  
山彦のほかになく音をこたへけむみやこにて鳴く山ほとときす  
このわたりみやことなりし今もなほ高らかに鳴く山ほとときす

時鳥

箱根路をむかししのひて越え來れはひと聲きこゆ山ほとときす

松花

天も人も常をうしなふ此の夏はさきやいてなむ十かへりのはな

桐花

香をとめておもひかけすも見いてけり今をさかりに咲く桐の花

首夏鳥

初なつの畔路ゆけはしつの男かはたつもの見てゑましけに立つ

鼓子花

土かひて待つ朝顔にさきたちて咲きそめにけりひるかほのはな

夏 鴉

暑ささくるひなの宿にてあかつきの鴉のこゑを聞くかうれしさ

夏 池

涼しさをひとり占むらし池の藻に羽をやすめていこふこてふは

夏 門

とく起きて明けたるかとに入り來たる風こちよきなつの曉

夏 夜

雨晴れぬつゆは光りぬ月は出てぬ心地よきかななつのゆふくれ

避暑

星月夜かまくらやまのなりところ海風うけてなつをわすれつ

山 吹

もの言はぬに色にほへる山吹は日ことにわれを如何に見るらむ  
わかにはの山吹見てもおもふかなにほふさかりの井手の玉かは

夕 顔

たそかれに友かり訪へはゆふかほは迎ふることく軒に咲きたり  
三日月のひかりやとしていとしくあはれましけり夕かほの花  
たそかれに友かり訪へはまかふまで軒端つつきに夕かほのさく  
雨晴れて露のしたたるゆふかほの花にしはしは見ほれぬるかな

納 涼

涼しさを追ひつつゆけは道の邊のやなきのかけに清水わき出つ

いさらゐに一むらにほふひつし草風にふかれてゆらくすすしさ

溪納涼

たにかはは岩をかみつつ流るなり清水むすひて暫しいこはむ

夏草

なつかしき花そまされるわか宿の庭のなつくさしけき中にも

草花先秋

そのの花いろさまざまに咲き出ててまたきに秋の景色なりけり

扇

手に持てる小さき扇いかにしてすすしきかせを吹きおこすらむ

汗

吹く風をへたつる垂簾まきあけてあせのなかるる肌に入れつつ

油汗ぬくひもあへすさたまれるつとめいそしむ人そたふとき

夕立

すさましく神ととろきて待つ雨もゆたかに降りぬ今日は嬉しく

鳴りわたる神の蒔きしか涼しさのころよきかなゆふ立のあと

秋

紫苑花

朝顔のおとろへゆけは朝つゆにぬれてしをには咲きそめにけり

龍膽花

りんたうのかけになくなる虫の音は花の聲かとうたかはれけり

芙蓉

露おける庭の芙蓉を見つつあれは蟬の音さへも涼しかりけり

新涼到

あさかほの花におく露したたりて涼しき秋になりにけるかな  
昨日今日秋來にけらし肌さむし明日は草木も黄はみそむらむ

案山子

うまし稻のこかね波うつ千町田にあるし顔なる古そほつかな

初紅葉

夕日さす窓にもみちの見ゆるかなまた一たひもしくれさりしに

紅葉

秋も今ふけぬとしるくもみちはのいろは彌生の花にまされり

秋ふかみおくしら露のそめつらむ木々のこすゑは紅葉しにけり

残暑

あさ露とむしのこゑとは秋なれと夏におとらぬあつさなるかな

秋といへとなかる汗のたえまなみおくつゆならて衣ぬらしつ

野亭蟲

秋の夜に野邊の一つ家訪らへは踏みところなし鳴くむしの音に

菊盛

秋ふかみおほうち山のうちも外も今をさかりときくのはなさく

寄菊懷舊

御園生ににほひあまりてさく菊の君かいさをたたへかほなる

そのむかし君かたてつるみいさをは菊と共にそにほひ出てける

秋されは菊もにほひて花そのに君かいさをのひかりそへつつ

秋山家

いもとせの庭にひろひしささ栗をやきてたのしむやまさとの夜

夕紅葉

ゆふはえに峯のもみちそくれのこるふもとの方は道も見えねと

柿 實

柿の實はその葉と共に色つきぬいさもきとりて兒らにあたへむ

秋 草

風もなき秋の日よりにさきにほふ野邊の千草の花をしそおもふ

秋

松はやしみとりは秋もかはらねとさすかに風の音にしらるる  
吹く風にいつもかはりはなけれども音のさえにて秋と知らるる  
今朝起きて窓あけ見れはつゆそおく夜の人まに秋は來にけむ  
いまもなほあつさは夏にかはらねと夜かせの音そ秋を知らする

秋 月

照るにつけ曇るにつけておもしろしふけゆく夜半の秋の月かけ

秋 風

秋たつといろに見えねと吹く風の木の葉をかへす音に知らるる  
昨日までいつこの隅にしひしか今朝きくかせのおとそ秋めく

月 前 露

てる月のかけをやとせるしら玉にこころして吹け秋の夜のかせ  
しらつゆは月のひかりに玉とはゆこころして吹け秋のゆふかせ

露

いかにしておく白露の染めつらむ木々のこの葉はもみ出てにけり

梟

秋ふけてなか夜の夢も覺めぬれは遙かにきこゆふくろふのこゑ

菊



さきかけの梅とならひて床のうへにほふもうれし殿のきく

冬

霜

夜もすから吹く寒風にさそはれて今朝はましろに霜のおきたる

山路霜

深山路をはやもきこりのほりけむあしのと見ゆ霜おける朝

水鳥

あやふきに近づけりとも知らぬかもよろこひつとふ新濱のいけ  
ふゆ立ちてみしかき日にも水鳥ののとかにあそふ御園生のいけ

枯野

昨日まで千草ももくさしけりしかかれ野の原と今日はなりけり

冬 松

おく霜のしろきにはえて冬來れば松のみとりもいやまさりけり

冬 獵

冬のはかりする人のおほければやまにも野にも幸そすくなき

冬 村

木からしに雪さへたくふみちのくの野山の村そあはれなりける

冬 苔

岩の上におひたる苔はしも雪の降るにもたへて來む春やまつ

落 葉

村鳥のとひ立つにやとなかむれは風にまひ散る木の葉なりけり

雜

山 色 新

富士のねも初日にはえて新しき御代の始をことほくかとそみる

神 社

(皇大神宮)

神苑に入れはこころも澄みにけりまた大前にぬかつかぬ間に

(熱田神宮)

御劔の御稜威はとはにかかやきて我か日の本は榮えゆきなむ

(鹿島神宮)

しみくと神代しのひてぬかつきぬ鹿島の宮のおほひろまへに

(香取神社)

あつま路に國つくらしし上つ代の神わさあふく香取のもりに

(明治神宮)

額つけはなみたこほるる世にまししひしりの御業偲ひ出てつつ

(石清水神社)

御ほとけとこころ協せて世をすくひ人を守れるかみはこの神

(氷川神社)

あら御魂の神のしつむる國なれば武藏の國と名つけたりけむ

(賀茂神社)

やまにより川にのそみて野をひかへ實に山城の鎮めなりけり

(熊野三社)

世の中に絶えていつはりなかりせは熊野牛王はいらさらましを

(伏見稻荷)

うかのみたま齊ふか中に此の宮居本つやしろと聞くそたふとき

銅像

(大村永敏)

上野山にらみて立てるすかたにて國をたひらけ身をもうしなふ

(西郷南州)

なにとなくたたおほきなる人として前に臨むとおもはれにけり

(山縣公)

いさましくくにの御楯とよろほひて天かけるらむきみの御靈は

(大隈侯)

つきの代に眼そそきてわかうとをやしなひ立てし君そゆかしき

(西郷侯)

さたまれるうつはにあらて靈ひなる人のはたらき君にこそ見れ

人物

(大織冠)

天の下をさめむ道もまこころもささくる沓にをさめたりけむ

(楠公)

とこしへにおほ君おもふひとすちにみかとをまもる楠木のあそ

(尊氏)

みなみ北あらそひますと装へともうら見る目ありさす指もあり

(義公)

にし山にかくれ棲めともことの葉は天か下をそうこかしにける

(樂翁公)

まめこころこめてにこりを清めつるいさをそ高きしらかはの君

(加藤清正)

大丈夫のかかみとそ見むもののふの道をはふみし君とおもへは

(田村鷹)

世のしつめくにの守りとよろほひてひむかし山に立てる君はや

(義家)

もののふの道起しつるそのために君のいさをはゆゆしかりけり

(阿倍仲麿)

身は譬ひもろこしの土に留むともいかて大和を戀ひさらめやも

(大石良雄)

時得すは高きいさをは立て得まし晝あんとうはさせられて

(静寛院宮)

もみち散る夕にそおもふ國のため家の爲にとつくされしきみ

高僧

(律宗開祖鑒眞和尚)

身を捨てて荒海わたり世を救ふこれやまことのほとけなるらむ

(天台宗開祖傳教大師)

君のためのりのためそとおもひみておこなひすます比叡の山中

(眞言宗開祖弘法大師)

傳へ來しのりをたくみに組み立てて成し了したる勳をそおもふ

(融通念佛宗開祖良忍聖人)

假の世のいろもこころも無碍なれば唱ふる念佛融通せてやは

(淨土宗開祖法然聖人)

山の上につちかはれたる念佛を里に植ゑてそおほしたてける

(眞宗開祖親鸞聖人)

阿彌陀佛廻向のまこと信受してのりのまにく西へこそゆけ

(曹洞宗開祖道元禪師)

深山木を人と看做して越のいほに説きし御のりのちから強さよ

(日蓮宗開祖日蓮聖人)

祖師の目に何かうつると人間ははのりと國との二つと答へむ

(時宗開祖一遍聖人)

南無阿彌陀なむあみたふと唱ふるは神と佛のをしへにそよる

名 勝

(富士山)

雲のうみ出つる朝日ををろかみぬ富士の高根の岩屋戸にして

(松島)

しほかまの神の御前にそなへけりこの大きなるけしき展きて

(吉野)

ものみなにむかししのはゆみよし野は花待たすとも名所にして

(嵐山)

春雨にけふるみとりのなこやかかさあらしの山とたれか名つけむ

(那智瀧)

天地のかけはしとこそあふかるれまなく落ち来る那智のおほ瀧

(嚴島)

いみしくもかさりてませり嚴島さすか女神のころつくして

(住吉)

たかさこの松とちきりしおいひとの今はいつこに落葉かくらむ

(寢覺の床)

あきたけて寝さめの床もにきはへりもみち狩する人のゆき來に

(霧島山)

皇孫の天降りましたる神代よりけふり立ちけむたゆるひまなく  
皇孫のみつほのくにを治らさむと天降りまししは此の山の峯  
のほらむもたかしたふとし皇孫の天降りましける峯をおもへは

(天橋立)

ひとたひはここにもまはせ天をとめ田子の浦にもまさる景色そ

(一つ松、美濃國有)

美濃山やくち木と聞きし一つ松みよのめくみによみかへりけり

皇大神宮

つねならぬときと云ふなりとりわきて守らせたまへ伊勢の大神

皇宮

大君は神にしませはみやとをろをかむ人のたゆるまそなき

天長節

大君のよろつ代いはふ今日こそは人のこころも神にかよはめ

國

日の本は御かかみの國たまの國たけくかかやく御つるきのくに

鳩

雲をわけ風をしのできてとふ鳩はなにのつかひをいそくなるらむ  
石清水御にはにつとふみやとは神の御言を待ちもこそすれ  
雲もなくはれたる朝にむつましく餌をひろひつつ鳩はあそへり  
老人の杖につかれてくもの上に上るほまれを得るは此のとり  
三枝ゆつる禮をまるとむかしよりむへ言ふそかし鳩の振まひ

龜

池の邊に岩かたまかふ龜の子によろつ代ふへき影をこそみれ  
物ことにいそかぬ龜のすかたこそいのち長かるもとるなるらめ

群鶴

心やすきすみかもとめてあしたつは熊毛の里にむれあそふらし

池邊鶴

池のへにこよひもたつこのゑすなり行きてを問はむそれの心を  
高らかに池のほとりに鳴くたつはおのかかけをや妻とこふらむ

蝸牛

かたつふりおもきをおひて急かぬは世わたる道を示すなりけり

鯛

いつ見てもここちよきかな鯛の浦むらかりをとる魚のすかたは

港

外國につかひしたまふ皇子の船まぢまつるらむ門司のみなとも

愛國

千早振る神のよさしし此の國そまもれもろ人こころあはせて

讀書

あたらしき文はよむともすめろきの遠つ御祖の道なわすれそ

故郷

いつ來てもこひしきものはむかしわか友とあそひし氏神のには

朝海

うらくくと朝日にはゆるあらうみに鯨しほふくさまそをしき

湖

大比叡のみねよりおろすかせたえて琵琶のみつうみなみ静なり

琵琶湖

しはしたに車ととめてなかめはや夕日にはゆる琵琶のみつうみ



淡路島

船ならはいかにかせまし淡路島きりふかくして波たかくたつ

曉 船

波を蹴て海原わたる船のうちに朝日あふくそうれしかるらむ

曉 雲

あかつきのそらにたなひくよこ雲はあめつちわかつ界なるらむ

浮 雲

やすらかに山にすむ身もうき雲のゆきき早きはうれはしきかな

高 樓

なるのち四年かほとにみやこ大路棟をならへて高とののたつ

橋

おくやまのほそたに川の丸木橋馬のりにしてわたりけるかな

雨 中 橋

けむり立つ小雨のなかの大橋は天のうきはしきなからにして

磯 波

磯を打つ波のすこさにおとろきてにくるもあはれ里のうなるら

海 邊 燈

ほたるなす小さきをちのもしひは船路を示すしるしなりけり

繪

文にみてさとりかねたる物の様もさたかに知りつ繪をは開きて

矢 竹

代々をへていろまさりゆく花ならてみのお山の竹のむらたち

おほひえの峯より移し植ゑたりし矢竹そ代々のしつめなるらむ

森 林

おとにきくえそか鳥根にわたり來て神代なからの林をそみる

樵 夫

あつしともさむしともせず日竝へてたききこるなる柚人あはれ

山 里

草木のみ友とすまひし山へにも鐵路しかると聞くはまことか

遠 燈

うふすなにたてまつる火か松はやしとほりて遠く影の見ゆるは

砲 聲

虎ほゆるくにのさかひに砲の音を聞きてやいさむ大和ますらを

花 下 車

小車に身は乗りなからしつかにもねりて花見るひなのほそみち

た の し

何ことの明日起らむか知らねとも今日はたのしく暮せ世のひと

か な し

はらからの血けふりあけて相うつは外國ことと云へとかなしも

忍 耐

沓取るも股をくくりてほほゑむも望みを持てるますらをの常

學 校

右ひたり向ふかたこそ變りけれおなしまなひや出てし友さへ

軍 人

外國のあたとたたかふいくさ人君のよろつ代よひてたふるる

僧

木の端といはるる恥をそそくこそ今の法師のつとめなりけれ

年魚

つりひとは年魚につられてなかき日を疲れいとはす川岸に立つ

匠

あたらしきさまのいへのみ建つる世にわさうしなはむ古き匠は

姿

たをやめのはやり追ふなる装ひこそ移りゆく世の姿なるらめ

窟

常暗のいはやのまへのつとひにはうつめの舞も見られさりけむ

杖

馬くるま行きかふ道を松葉杖つきつたとるひとのかなしさ

柱

國からもやまところもめを神のはしらめぐりに始まりにけり

西京

神ほとけいらかならへてまもります西のみやこはとはに榮えむ

花瓶

室に入りて花生けみれはあるしなるひとの心もよみえらるへし

膝

風雲をおこさむ友のことあけにひさをすすめて聞き入りにけり

袋

世のなかのたからやあまたをさめたる福の御神の持たる袋は

糊

世の中に糊のちからのなかりせははなれ／＼にものはなりなむ

布

國の富ますへきわさとおもひつつをと女や布をおりきそふらむ

雨

雨降りぬ昨日も今日もおととひも風さへ添ひて日は暮れむとす

土

かかやきてつらなる星も月も日もおほ空めくる土くれときく

藻

猿澤の池のたま藻を見やりつつ采女のこともおもひ出てげり

旅行

月に日にむかしのさまのきえゆくを惜しくそおもふ旅の道にて

未 來

折にふれ心におもふことはあれといまた來ぬ世は夢にたに見す

懷 舊

葉山鴻きしのかり宮をかみつつしのふもなみた去年のこのころ

山 家 夜

いととしく静けき夜半の山里にこころ細くもふくろふのなく

折にふれて

としとともに庭の姫松さかゆるに人のみたたにくたち行くなり

舊友高木藤太郎氏來訪

おもほえず友の訪ひ来てたのしくもむかし語りに時すこしけり  
かなりや

千代くゝとあさなくゝにうたひつつ夢おとろかすかなりやの聲  
竹

霜をしのきつもる雪をも物とせずすくに立ちたる竹は我が師か  
松 蔭

散りしける落葉かきつつ妹とせかかたりかはせり松のしたかけ

茹葉會に出席して

相見つつ先つうれしきは石上古き友等の集ひなりけり

無 常

いととしくあはれ催す病む床に二人の友のみまかる聞きて  
常なきか世の常なから身まかりぬすこやかなりし友は二人も  
昨日まで語りあひつる友人の今日はなしとはゆめか現か  
古稀を迎へて

年といふ留まらぬものを七十まで追ひ来て我は老いにけるかな  
石上ふりにけるかな七十まで止まらぬ年を追ひ來しわれは  
ともかくも稀てふよはひ迎へけりなすこともなくよの波につれ  
おいらくの我身の手足なつるかなあはれ昔のさかりこひつつ

## 中川翁の古稀を壽きて

瀬を早みすきしよはひは中川の長き流の水上にして

## 西忠義翁の生祠となれるを壽きて

いと早く蝦夷か鳥根に渡り行きて御稜威ひろめし君そたふとき  
つみおきし功のむくい早く来て生ける世なから神となりにけり

## 北支事變

自らの責を盡さす人へのみ頼らむとする心いやしき  
責重く命輕しと君のためつくすは大和ますらをにして  
君の惠民の誠に織りなせる皇軍の前に敵あらめやも

## 日支事變

走り猪に踏みあらされし蓬生もつゆの下より青みそめなむ

あたの首都もろくも落ちぬいささらは甲斐ある戦いつち求めむ  
物云はぬ人を迎へて勝いくさ祝くわか胸に涙新たなり  
唐のはてまでひひけ益良夫を送るしも夜の雄叫のこゑ  
大御稜威いてらすところみいくさに眞向に立つ敵あらめやも  
寢覺して秋の長夜に思ふかな今や皇軍何地行くかと  
敵のみやこ今し落ちにき戦のいとくちここに開けつと見む  
敵のみやこもろくも落ちぬ手こたへのある戦はこれよりと見む

## 昭和四年孟夏大島に行幸ありければ

大島やみゆき迎へて夏草もうれし涙の露にぬれなむ

## 奉祝即位大禮

高御座ふみます今日と天地もゆるかむはかり萬代よはふ

民やすく國治まりて天津日嗣しろしめすなる今日そ尊き

寄巖祝

天少女なつる巖のつきむまていやすこやかに榮えませ君  
大岩の庭に据わりてとこしへに君かよはひをまもりかほなる

寄松祝

十かへりの松の花さく春までもわか大君は榮えまさなむ  
大君の千代萬代を祝ふかな高根の松の天にそひえて

祝米壽

千代の坂のほり行くへき君なればよねのよはひは老の山口  
御園生に靜に立てる相生の松ときそはむ君のよはひは

賀結婚

妹とせかよろつよちきる今日の日は花鳥さへもうれしけに見ゆ  
千早振神の御前にちかふなる心わするなともしらかまで

祝出產

鶴の子の千代呼はふらむ初聲を聞くそうれしき今日の上き日に

昭和四年五月一日近畿中國に於ける

明治天皇の聖蹟をたつぬる旅に上りて

汽車の旅出つればはやも都路は雲のかなたに見えすなりゆく

御殿場驛を過ぐる頃雲深くて不二の山見えさりければ

來て見れはおもはゆけにも不二の山雲のとはりに姿かくしぬ

濱名湖を過ぎて

道走る車にあれと右ひたり小船うかへる海の上ゆく

住吉神社に詣てて卯の花祭にあひければ

歌姫の卯の花ささけ舞ふまつり何時の代よりの習なるらむ

五月十日後村上天皇の行在所たりし正印殿の跡を尋ねて

そのかみのかりみやの跡たつぬれは麥も秀てすあれにけるかな

嚴島神社に詣てて

草も木も山も海路もなよひたりむへ姫神の宮居なりけり

昭和八年中秋支那滿洲朝鮮に旅しける時瀬戸内海にて

雲と水連なるあたり帆前船月のみやこをさして行くらむ

天つ神ありましけるその上もかくやとそ思ふ夕映のそら

玄海灘にて

波の音船のゆるきも物とせず乗り切るこよひ心地よきかな

憂ひたる海もことなく打ちこえつゆくさき見えて心落ちるぬ

船の進行につれて

古の任那の跡をのそみつつ船にまかせてはしるうなはら

四つの船通ひし路やここならむ朝の風になやまされつつ

時々夢さまされて聞くものは波きる船の音のみにして

天津上陸後

國民のさかゆくきはみいつこにも神のいますそ心うれしき

北平天壇を見て

天に在す神の降りて地にいますみかたとに逢ふはこの壇の中

萬壽山の宮殿を見て

山水のなかめの上にくみをもそへて飾れるはなれみやかな



中秋無月なりければ

又來むの望なければもちの月暫しは照らせこの里にして  
大連にて

傳へ聞く文珠のさとは此處なるか來て見る今日そ嬉しかりける  
臨み見る星か浦曲に思ふかな昇る朝日とてる月のよを

北平郊外玉泉山にて取り來し朝顔の種子蒔けるに

花の咲き出てければ

玉泉の山にて取りし家苞は盛に匂ふ朝顔のはな

四十餘日の病床日誌

大正十四年四月二十三日東京發京都地方に出張二十四  
日入洛其後二十六日より稍熱氣あるを覺えたり二十七  
日奈良に赴き帝室博物館に正倉院の裂地を見などした  
り然るに病勢は減退せず漸次増進する傾あり五月一日  
は體溫朝三十六度八分夕三十八度四分あり二日は朝三  
十七度八分ある故旅館の近隣の長井醫師に診察を受け  
旅館に靜養することとす午後四時頃には三十九度に上  
る三日朝は三十七度夕は三十九度解熱劑を二回頓服す  
るも效なく四日看護婦山根妙女を雇ふ五日京都府立醫  
科大學醫院に入院す即ち

男子の祝日と聞く五日の日入院するは何のえにしか  
七日病名定まりて隔離室に移る

かりそめの風邪かと思ひし發熱はチブスといへる疫病なりけり

八月同行の黒井編修官補歸京す

今日よりは世の情のみ頼みなむ病む旅路にて道つれはなる

九日始めてグリセリン浣腸を施さる

生れ來て始めて知りぬ日本一氣持のわろき浣腸といふ事

十日十一日十二日

銀婚の大御祝に出てられず旅に病む身の悲しかりけり  
東京はさそ賑はむ西京も三日にわたりてさわく祝典

十三日面會は熱度昂進の恐ありとて訪客に事情を話し

て面會を謝絶せる者兩三名あり

面會は樂しきものを熱の爲ことわる事の心わひしき

十四日

この床を我か世とそ思ふ足腰の自由かなはぬ今の身にては  
晝は熱夜は悪夢に襲はれてうまいもならず明し暮しつ  
身はここに二豎に縛はられ臥しをれと心は馳する宇宙せましと  
かけめくる心の駒のゆく先は主我と無我との二つなりけり  
主我觀にふける間は何時も皆窮窟に落ちて悲觀のみする

十五日以後

御入洛の日嗣のみこの噂きき苦しき中に心ほほゑむ

十八日杉圖書頭使を遣して病を訪ひ植木一鉢を贈らる

寮の頭賜ひしきつきうつくしく花咲き出ててやまう人なくさむ

十九日家妻來り訪ふ

あらかしめ知らせもなくして我妻は訪らひ來けりをの子伴ひ

二十日

大丈夫食の進むと醫師の言ふ聞きて覺りぬ病重きを

十九日宮内省圖書寮御用掛猪熊信男君より

さちあれと御所の御庭の砂そへて君にあふひの花たてまつる

と云ふ短冊添へて葵の鉢植を贈り來れる返歌

あふひよりも御所の御庭の砂よりも君の誠をいたたまつる

二十二日

なるゆれは最後の處置を思ひけり自由かなはぬ此身ながらも

二十四日紀州舊藩主徳川頼倫侯心臓麻痺にて俄かに薨

せられきと聞く侯は久しく予が知遇を辱うする所なり

名も高く徳また高し

圖書館の父ともたたふる五色侯薨くか驚く半餉はかり

(註) 色白く御馬は赤く御めし黒紋は葵の紀伊の殿様

といふ諺を思ひ又侯は舊領地と親しむに力めら

れしを以て斯く云ふ

此日病熱降りて平熱となる

熱降り歸京の望近づきぬ馬角生する思ひこそすれ

二十五日電降り大雷雨

これはさて世は倒になりけり梅雨に入る前雷神出現

二十八日二十四日より熱下り以來平熱退屈甚し

莫迦になり昨日もけふもをとつひも唯病床に安閑と臥す

二十九日淨土宗三時知恩寺門跡久世成章尼の頓滅を聞

く同尼は宗内に譽高し

ほまれある知恩寺門主頓滅す無常迅速南無阿彌陀佛

三十日課員諸君より寄せ書の葉書來る中に武岡博三君

の「賀茂川の水の流にあけて昨日も今日もわひし

くあるらむ」とある返しに

賀茂川の流にあらて床近く響くは電車モートルの音

又秋山光夫君の「多比爾志立彌美多麻布大人乃宇邊乎於毛

布佐美太禮古呂能伊加爾和備志幾」といふ返しに

三十一日

打ち臥してはやくも三十日すきけるか長くも思ひ短くもおもふ

六月一日

月かはり人は衣を更へぬれと我身ひとりは同しふしとに

三上參次先生より花鳥畫譜二冊慰問にとて書狀添へて

贈與せらる

恩師よりまことをこめし贈り物とる手遅しとをろかみてみる

畫譜を見たる感

實物はにくけに見ゆる蠅螂も畫にをさまりていつくしくみゆ

五日芝、武岡兩君持參せられし圖書寮高等官一同より

の贈物を受く

消毒の關ありと聞き驚きて忽ちかくす同僚の賜物

陰曆五月に入りて蒼蠅頓に激増す

五月蠅とは誰か書きそめし蒼蠅は阜月半はに急に出盛る  
うるさきは猶忍ふへしまき散らす病毒いかにと身の毛よたちぬ

芝君と話題天候に及ぶ

五月雨は東のものか京都には夫かと思ふ雲霧もなし

六日支那の動亂を聞きて

處士横議昔なからのこまりもの今や始めて秦史を思ふ

九日以後雷鳴屢々なり

賀茂北野護王御社鳴る神に縁ある宮居近くいませは

偶感

世の中のきはにはあらぬ事に遇ひて人の心の奥そ知らるる

一、電車モートル

電話の音

呼ぶ叫ぶ哭く

笑ふ聲

氷炭割り

バケツとぶ

廊下走るも

騒かしや

二、同じ響の

中にも

朝夕告ぐる

鐘の聲

曉はやく

鳴る木魚

いうにあはれに

きこゆなり

六月十四日退院の許可を得たり

今日こそは退院ゆりて出つるなれ何にたとへむこのうれしさを

生れつきよわき此身に幾度も重き病をしのくそくしき

十八日

日々に身の強さを増すを覚えけり猶大君につかへ得へきか

十九日午後八時四十分急行汽車に任せて歸途に就く

送る友迎ふる妻にたすけられおほつかなくも歸途につきけり

二十日朝事故もなく歸宅す

夢現絶えす偲ひし鳥か鳴く東の里に歸り來にけり

病みほほけ變り果てたる姿見て浦島の子の思ひそしける

遺稿

本多辰次郎

平安朝

奎運之隆推平安

宏才碩學滿騷壇

或長記誦或墳典

或巧詠歌或筆翰

佛老並行競其盛

亦見神道能比肩

庠序門開育英急

藝苑濟濟生芝蘭

乃及弘仁承和世

芻蕘詞賦猶可看

女流文章雄百代

緇林龍象厭三端

延喜天曆治化遍 四海恬熙真大觀

和高島九峯翁勿來關址歌

賦桶狹間古戰場

元龜天正統制缺	六十六州慘雲日
羣雄爭逐中原鹿	擬奉錦旗揮斧鉞
織公勇智本天錫	崛起尾城方結髮
國土雖小英明揚	鳳詔一下大勢決
今川義元猛然興	風靡駿遠諸豪傑
乃擁大旆試西上	沿道響應皆就列
織公見機甚俊敏	一劍倚天凜冰雪

大蛇中斷海內震	遠交近攻策復絕
滅濃親江卽朝覲	赫赫尊王效忠節
桶挾千年留斷碑	啾啾鬼哭夜幽咽

遊三浦半島有感作

保元己降王德涼	武門武士日跳梁
坂東地利稱天造	武相二州人勇強
大頭將軍源賴朝	乃藉父祖八世慶
西滅平氏北藤氏	遠邇懾服有誰當
霸業相傳七百載	僭濫雖有竊皇綱
紀律嚴明衆士畏	勤儉簡素民屬望

吾今半島尋遺蹟  
 或過城址或戰場  
 桑滄少變可徵古  
 追懷當年獨徜徉  
 海潮拍拍打押角  
 清風拂拂暑忽忘  
 岬角左轉一路杳  
 久里浦賀相接疆  
 橫須賀更在指顧  
 艤幢填海何堂堂  
 憶昔嘉永癸丑夏六月  
 米艦四隻來助勤  
 上下驚愕失舉措  
 海內鼎沸人欲狂  
 廷臣惑兮吏幕憂  
 諸侯動兮志士傷  
 尊王之論漸醞釀  
 討幕之議益激昂  
 回天事業乘勢成  
 明治中興功烈揚

何知叢爾半島地

長爲邦家放昌光

湯河原遊行

豆相國境陝區藏  
 夙稱地險人勇剛  
 石橋之山樹鬱鬱  
 真鶴之岬水洋洋  
 維昔英雄龍蟄地  
 擬乘風雲試飛揚  
 一朝見機蹶然起  
 四隣響應互想望  
 驅使群雄開霸府  
 後嗣二代卻郎當  
 忠臣良吏豈無人  
 土肥父子功最光  
 昭和辛未初秋候  
 吾來偶坐湯磧湯  
 此地今以溫泉聞  
 卽是當年土肥鄉



鄉中古刹城願寺  
七百餘載白檀香  
實平遠平暨族黨  
三十三基碑作行  
君不見鎌府霸跡何所有  
狐兔跳梁草茫茫  
獨有土肥鬼不餒  
行客酌酒感慨長

藤里博士

昭和辛未初穉 太田鐵次郎拜草

覽古篇成澡浴時  
靈泉豈莫助清奇  
尤推史眼明如炬  
是不尋常騷客詩

答雅契太田君見寄次其韻

銷暑湯溪澡浴時  
吟思頓動自驚奇

推敲刻意賦長古  
苦笑吾才不適詩

詣住吉神社訪正印殿址有感而作正印殿

者在社殿後正平二十三年後村上天皇崩

御之處而長慶天皇踐祚之殿

千里茅渟海汪洋  
奉祀海神神德昌  
崇高古廟映天日  
祈福有人來往忙  
往昔正平建德際  
正印殿裏奉真皇  
當時盡臣克致節  
惆悵遺蹟空荒涼

明治天皇

旭日東方出  
聖皇天所生

恢弘祖宗業

何啻守其成

楠公

夢兆有徵靖帝宸  
維新大業其因久

勤王三世義逾振  
勳業當推第一人

題山陽先生圖像

天生偉器化政時  
外史一篇賤心血

大節高風舉世知  
圖像永仰精悍姿

秋霖

布衾坐覺曉寒生  
連日秋霖故倦枕

籬菊叢邊蟋蟀鳴  
忍聞檐滴徹宵聲

蟲聲(輓茅田翁)

月有盈虧人死生  
悵然隱几秋齋靜

夜臺孤往若為情  
忍聽哀蛩唧唧聲

秋夜讀書

月到天心光以銀  
燈前閑把離騷讀

秋風入座氣清新  
堪憫行吟澤畔人

秋涼

夜色閒軒秋氣催  
滿池荷葉未全敗

蟲聲唧唧轉堪哀  
一陣西風送雨來

睡蓮

不染淤泥覆小池  
斯花特色君看取

清妍何讓白蓮肌  
不使人知落後姿

銀座街散策

綠酒紅燈西復東  
滿街無地著吟屐

衆音聒聒使人聾  
去步清風明月中

近火

祝融爲怒焱煙騰  
亂打驚鐘頻報急

風伯煽揚威倍增  
幸雖火鎮尙兢兢

中華民國

五族四蠻雜糅區

厚顏自號夏華衢

聖蹤賢跡茫難繹

偏恐中華卻化胡

本多辰次郎略年譜

明治 元 年 四月十五日 愛知縣海部郡津島町ニ七里長兵衛ノ次男トシ  
 テ生ル  
 同 十九年 上京シテ淺草小島町ニアリシ大谷教授ニ入學  
 ス  
 同 同 大谷教授高等科ガ京都ニ移リシ爲共立學校(後  
 開成中學)ニ入學ス  
 同 二十二年 共立學校卒業ト同時ニ第一高等中學校へ入學  
 同 二十八年 第一高等中學校卒業東京帝國大學國史科ニ入  
 學ス  
 同 三十一年 帝國大學國史科卒業帝國大學大學院へ入學ス  
 同 本多正開ノ養子トナル

同 三十六年 五月 山形縣立中學校教諭心得トナル  
 同 年十二月 山形縣立中學校長トナル  
 同 四十一年 二月二十二日 願ニ依リ山形縣立中學校長ヲ免ゼラル  
 同 年 二月二十四日 宮内省圖書寮ニ出仕ス  
 同 年 五月 圖書課長トナル  
 大正 三年 圖書寮編修課長トナル  
 同 四年 三月 昭憲皇太后實錄編修主任ニ任ゼラル  
 同 十三年 九月十五日 文學博士ノ學位ヲ授ケラル  
 同 十五年 六月三日 願ニ依リ本官ヲ免ゼラル同日臨時帝室編修局  
 御用掛仰付ケラル勅任待遇  
 昭和 八年 七月二十九日 願ニ依リ臨時帝室編修局御用掛ヲ免ゼラル  
 (七月明治天皇御記完成ト共ニ)  
 同 年 八月二十四日 特旨ヲ以テ位一級昇進 正四位勳三等ニ敘セ

ラル

同 年九月

法政大學立教大學ニ講師トシテ奉職

同 十一年九月

健康勝レズ爲ニ兩大學ヲ辭ス後家ニアリテ讀

書ヲ主トス

同 十二年十月十八日

家ヲ一男正一ニ相續セサセ女親子久子ト共ニ

分家シ居ヲ大森區久ヶ原町九一三番地ニ定ム

同 十三年五月

胃腸ヲ害シ此頃ヨリ時々床ニ就ク

同 年七月八日

午前九時二十分逝去 行年七十一歳

同 七月十日

自宅ニ於テ葬儀法名眞知院釋成覺

夫辰次郎逝きて三とせの命日にあたりかき散らし置きたる詩歌をあさり集めて一冊となし之を佛前に供へいさゞか供養にかへなむとす 抑々夫は若き頃より國史學に志し此の筋の事には疲れをも忘れて説き聞かすと云ふ有様にて其種の書籍は云ふに及ばず何の書くれの書との差別もなく讀み耽りつゝ逝去の前日まで殆ど時日をこの方に費したりともいひつべしさるが中にも晩年には折にふれて詩歌を賦して樂しみとし居たりしかば此度そを此の集に綴るに當り歌は鳥野幸次先生に詩は牛田松南先生に高閑を乞ひ幸

ひにしてかくは出来上りたるにこそ 依りて茲に其  
の由来を記し且兩先生に厚く謝意を捧ぐ

ありし日に書き遺したることの葉を

つつりてささくみほとけのまへ

文之

父なくてはやも三年になりぬれと

今なほいます心地のみして

亡き父と共に語りしわか夢の

さめたる時のころさひしさ

親子

朝ことにうつしゑみつつ思ふかな

父のみたまの安くいませと

亡き父のかたみの品を手にとりて

しのふもかなしましし世のこと

久子

405  
117

昭和十五年六月三十日印刷  
昭和十五年七月八日發行  
(非賣品)

編輯兼  
發行者 本 多 文 之

印刷者 東京市下谷區二長町一番地  
山 田 三 郎 太

印刷所 東京市下谷區二長町一番地  
凸版印刷株式會社

終

